

「しあわせ」の再定義と定量的尺度作成のための調査研究

～個人の価値実現をサポートする金融サービスのあり方を哲学的見地から検討～

2022年12月

京都大学大学院文学研究科哲学専修・教授

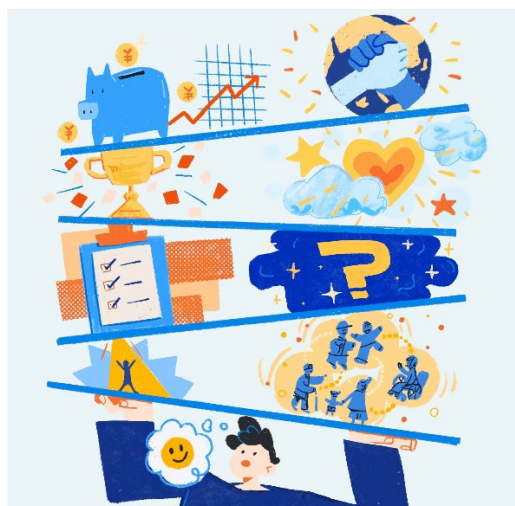
出口康夫

京都大学大学院文学研究科哲学専修・特定准教授

大西琢朗

株式会社お金のデザイン・お金のデザイン研究所・取締役副会長/ファウンダー

廣瀬朋由



1. 本研究の趣旨：「しあわせ」へのシフト

本研究は、「資産形成がもたらす価値とは何か」という問いを念頭においた、幸福概念についての哲学的考察を通じて、「わたし」に固有な価値と「われわれ」にとっての公共的価値を統合した、**多様な価値のマトリクスとしての「しあわせ」を可視化する尺度**を提示する。「**ライフ・インテグレート尺度**」と呼ばれるこの尺度は、行為主体にとって固有な「しあわせ」像を可視化することで、資産形成を含む経済活動のみならず、広く「しあわせ」を追求するアクチュアルな行為へ向かって、「わたし」、そして「われわれ」を駆動することを意図している。

お金から「しあわせ」へ：金融機関と哲学のコラボレーション

「老後 2000 万円問題」などが喧伝される一方、貯蓄・保険や投資を総合的に組み合わせる資産形成を行う習慣はまだまだ日本には定着していない。一口で言えば、「お金について考えるのは気が重い」というのが、多くの人に共通する実感であろう。これは、お金というものの特性からして当然のことでもある。お金は誰にとっても同じ、普遍的な価値であり、だ

からこそお金は通貨として機能する。しかし裏返せばそれは、数値として表されるお金が、ほかならぬ自分にとってどのような意味をもつのが不明であり、結果として資産形成へと向かう内発的動機づけが得られないということでもある。健全な資産形成習慣を根付かせるためには、**お金を自分固有の価値と結びつけて考える契機**が必要である。

また、資産形成は、人生におけるさまざまなライフイベントを想定しながら行われる、**ロングタームのプロセス**である。たんに資産額を増やしていけばよいものではなく、それを何に使うのか、すなわち資産の活用までをも視野に入れ、**人生全体を統合的に検討する**という、負荷の高い作業を行う必要がある。これもまた、お金について考えることの気の重さにつながっていると推測される。

少し違うところに目をやるならば、気候変動や格差・差別といった社会課題に対する意識の高まりを受けて、近年では「エシカル消費」という言葉も生まれるなど、**経済活動における公共的、倫理的側面**に注目が集まっている。お金のデザイン社が取り組む資産運用の分野でも ESG 投資を代表例として、事業を通じて社会課題の解決に貢献し、公共的な価値を実現しようとする企業への投資が好ましいとされる潮流が見られる。狭義の経済的価値にのみ拘泥し、短期的な運用成果に振り回される日本にとどまらず諸外国にも見受けられる現状を鑑みると、これは歓迎すべき傾向であると言える。

つまり、「**お金**」は、**より包括的な価値とつながっている**。お金という普遍的価値は、私たち一人ひとりに固有の価値観、そして人生全体に対する統合的な視点と結びついてはじめて意味をなす。そして私たちの価値は個人に閉じたものではなく、つねに「われわれ」の価値へと開かれている。一般には「幸福」や「ウェルビーイング」と呼ばれるそうした包括的な価値を、ここでは本研究独自の視座を込めて「しあわせ」と呼ぶならば、**狭義の経済的価値の領域にとどまらず、それを超える「しあわせ」へとアプローチすることは、資産形成を通じて顧客と社会に貢献せんとする金融機関の責務とさえ言ってよいだろう**。

本研究は、**金融機関としてのお金のデザイン社と、大学に属する哲学者との共同研究**である。哲学は、古代ギリシャのアリストテレスに端を発する幸福論の長い伝統をもつ、価値についての学問として、学術的厳密さを基盤としつつも、社会に向かって積極的に新たな価値を提案する責務を負っている。「お金」についてのスペシャリストとしての金融機関が、より包括的な価値としての「しあわせ」に取り組むにあたって、**価値についてのスペシャリストである哲学者とタッグを組むのはきわめて自然な流れ**と言える。

ライフ・インテグレート尺度がサポートする「しあわせ」へのシフト

本研究は、幸福・ウェルビーイングについての従来の学術的諸研究を踏まえ、本研究独自



ライフ・インテグレート尺度がサポートする「しあわせ」へのシフト

の視座にもとづく幸福観としての「しあわせ」像を明確化し、「お金」という狭義の経済的価値から、より包括的な価値としての「しあわせ」へのシフトを、そして資産形成を「しあわせ」追求の手段として位置づけることを、顧客に、そして社会に提案する。

より具体的には、この「しあわせ」のシフトは、

- 普遍的であるがゆえに強い意味づけを欠いた「お金」から、ほかならぬ**自分にとっての固有性をもつ価値へのシフト**
- たんなる数値としての資産の増減という観点から、さまざまなライフイベントを視野に入れた、人生に対する**統合的視点へのシフト**
- 狭義の経済合理性のもとで個人に閉じた価値から、公共性・倫理性をも重視し、世界と未来への展望をもった、「われわれ」に**開かれた価値へのシフト**

からなる。そして本研究ではこのシフトを促すためには、個人が活用可能な尺度の開発が効果的であると考え、一人ひとりに固有の「しあわせ」像を可視化し、その実現のためのアクションを導く**ライフ・インテグレータ尺度**を開発した。

ここまで述べてきたように、「しあわせ」とは、例えば資産の大小というシンプルな指標で測れるようなものではなく、人生を構成するさまざまな要素を、借り物ではない自分に固有の仕方の意味づけ、互いに関係づけていくなかではじめて見えてくる、**多元的な価値のマトリクス**にほかならない。そして、「しあわせ」はそれを実現する具体的なアクションと結びつくことではじめて意味をなす。「しあわせ」へのシフトは、**私たちの行為を駆動するものでもなければならぬ**のである。

しかし、このような仕方では「しあわせ」像を明確化するというのは、誰にとっても独力では困難な作業である。ライフ・インテグレータ尺度は、この状況に対する処方箋として機能する。ライフ・インテグレータの8つの尺度項目を用いた「現状」と「理想」の自己診断を通じて、多元的な価値のマトリクスとしての「しあわせ」像を自分に固有の仕方でも可視化し、次なるアクションへの指針を立てることができる。ライフ・インテグレータは、**私たち一人ひとりが、自分らしい「しあわせ」像を自分自身で描き出し、それに向かって行動する、「しあわせ」追求のプロセスをサポートする**尺度である。

本研究が提案するのはあくまで、一人ひとりが「しあわせ」について考えるための尺度であり、ある特定の幸福像、幸福観を押し付けようとするものではない。それでも、その尺度項目の構成および内容には、本研究独自の視座が含まれている。以下では、哲学や心理学、経済学などにおける従来の幸福研究の成果と関連づけながら、ライフ・インテグレータ尺度とその背景となる幸福観について、説明する。

2. ライフ・インテグレータ尺度

ここでは、本研究の提案するライフ・インテグレータ尺度の構成と内容をかたんに紹介する。

尺度項目と活用方法

ライフ・インテグレータ尺度質問項目

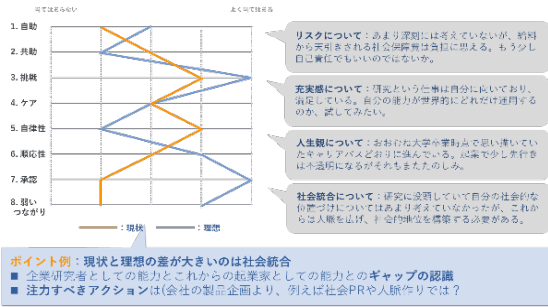
1. [リスク・自助] 病気や災害などさまざまなリスクに対して、自分で貯蓄等の備えを整えている／整えておきたい
2. [リスク・共助] 病気や災害で収入を得ることができなくなるなど、自分が本当に困ったときに、自分が属している社会・共同体は自分を助けてくれると思う／助けてくれる社会・共同体であってほしい
3. [充実感・挑戦] 日常生活・仕事・その他の活動において、自分の可能性を限界まで追求している／追求したい
4. [充実感・ケア] 休息や趣味、家事、家族・友人とのコミュニケーションなど、自分にとって大事な人・もの・ことに対して、十分な時間をとっている／十分な時間をとりたい
5. [人生観・自律性] 長期的な目標を設定し、それに向かって計画的にものごとを進めている／長期的な目標を設定し、それを実現するための人生設計をもっておきたい
6. [人生観・順応性] これまでの人生では、思いがけない出会いや出来事によって想定外の展開が起ることが多かった／想定外の展開が起ることに期待している
7. [社会統合・承認] 自分が社会の中で認められていると感じる／感じていたい
8. [社会統合・弱いつながり] 近所の住民や店員、仕事上の顔見知りなど、会えば挨拶をする程度の知り合いが多くいる／多く作っておきたい

本尺度は以上の 8 つの項目からなる(各項目に付したキーワードはこれから順次説明する)。各項目は、従来の幸福研究においても幸福／ウェルビーイングに関連するとされてきたファクターについて、回答者の「現状認識」と将来の「理想」を尋ねる質問である。回答は「よく当てはまる」から「当てはまらない」までの 5 段階評価による。

回答は以下のような仕方で自己診断に用いることができる。まず、「理想」項目の回答マトリクスの全体が回答者の「しあわせ」像の統合的表現と考えられる。そしてもし「現状」についての回答が「理想」と大きく乖離していないなら、回答者は現状の生活に概ね満足していると判断できる。一方で、「現状」についての回答が「理想」よりも大きく下回る項目があった場合には、その項目が、今後のアクションにおいて注力すべき領域だということになる。また、この診断を継続的に行い、マトリクスの経時的変化を見ることで、自分の価値

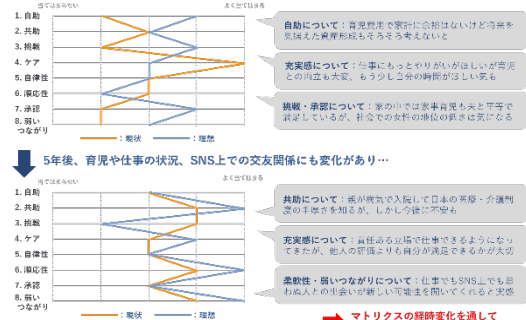
観の変化や活動の成果を見定めることができる(下図活用想定例を参照)。

想定例(1) 30才/男性/企業研究所勤務/パイオ関係で起業を考えている



➡ 現在の生活や人生全体をさまざまな角度から統合的に検討。現状と理想のギャップを認識し、次のアクションにつなげる

想定例(2) 32才/女性/夫と子2人との4人ぐらし/都内企業勤務



➡ マトリックスの経路変化を通して価値観の変化と活動成果をモニタリング

この尺度は、既定の基準による幸福度の採点ではなく、むしろ自分なりの幸福像を自ら見定めるためのものである。例えばある項目の点数が低いからと言って、それはその人が幸福でないということを意味するわけではない。重要なのはその人にとっての理想がどのようなものであり、それと現状とのあいだにどのようなギャップがあるか、である。

尺度項目の分類

ライフ・インテグレータの8つの質問項目は、**2種類の幸福観**と幸福を構成する**4つのファクターの掛け合わせ**からなる。2種類の幸福観とは、本研究独自の「わたし」型幸福観と「われわれ」型幸福観という分類である。

「わたし」型幸福観 (質問項目 1,3,5,7)：個人が自律的で自足的な人格として完成すること、そのような完成へと向かうことに価値を置く幸福観

「われわれ」型幸福観 (質問項目 2,4,6,8)：自分が大切に思う(care about)事柄との関係において自己の存在を考え、それとともに生きることに価値をおく幸福観

本研究では、「しあわせ」とは、これら2種類の幸福のあいだの緊張感をも伴うバランスのなかで実現されると考える。これらの詳しい説明はこのあとの3節で行う。もう一つの軸は、幸福に関連することが直観的に明らかであり、従来の幸福研究においても認められてきた4つのファクターによる分類である。その4つのファクターは以下の通りである(詳細な説明は4節で行う)。

幸福の4ファクター

リスク (質問項目 1,2)：幸福の阻害要因となるリスクへの対応

充実感 (質問項目 3,4)：日々の生活のどのような部分に充実感を求めるか

人生観 (質問項目 5,6)：人生全体を俯瞰的に眺めたときの捉え方

社会統合 (質問項目 7,8)：自分の周囲の社会環境との付き合い方

人生の異なる側面にそれぞれ光を当てるこれら4つのファクターは、幸福を網羅的に特

徴づけるというよりも、回答者が自身の生活に引きつけて考えやすいことを考慮して選択されている。ライフ・インテグレート尺度は、「わたし」型幸福と「われわれ」型幸福のバランスを、これら 4 ファクターが示す人生の異なる側面から検討可能とするよう設計されている。

3. 「わたし」型幸福観と「われわれ」型幸福観

この節では、ライフ・インテグレート尺度を構成する一方の軸である「わたし」型幸福と「われわれ」型幸福について説明する。

さまざまな幸福論や経験的幸福研究を見ても、幸福を構成するファクターのリストは、結局のところ似通ったものになる。一般的には、身体的・経済的リスクに対する備えをし、人生全体への見通しをもち、周囲との良好な人間関係を保ちながら、毎日を充実感とともに過ごすこと、これが幸福であると言ってよい。難しいのは、そのような一般的な幸福像を、自分の性向や願望、置かれた状況に照らして、自分独自の具体的な幸福像へと、ひいてはそれを実現するための具体的なプランへと落とし込むことである。

本研究では、そのような困難が生じる根本的な原因を、2つの異なる幸福観のあいだの緊張関係に求める。それらは一方で相反するようでもあり、他方で互いが互いを必要とするようでもある。幸福はそれらの間で絶えずバランスをはかることで実現され、維持される。大阪にある、地域の高齢者のためのコミュニティサロンで参与観察を行い、そこでの人々の幸福とは何かを考察した文化人類学者の論文から一節を引用しよう。

意味のある、満足した実存を保つために、彼女たちは、多くの要因のあいだのバランスをとろうとしている。彼女たちは、自律と助け合いのあいだに、そして、孤独と社会関係の負担とのあいだに生じる緊張関係の折衝を行っているのである。(I. Kavedzija (2015), The good life in balance: Insights from aging Japan.)

健康を気遣いあったり、旅行のお土産を食べながらおしゃべりしたり、サロンでの人間関係は、そこに集まるお年寄りたちに喜びと安心を与えるが、同時に彼女たちは、その関係が互いの負担にならないように、一定の距離をとる慎重さを失わない。迷惑や心配をかけるのはお互いさまだが、そうならないよう自立した生活を心がけるのもお互いさまである。そのバランスは人によって、時と場合によってさまざまであり、彼女たちはつねに注意深くそれを計りながら、幸せな人間関係を維持しようと努めている。

一方に、「自律」や「自立」「自足」をキーワードとするような幸福観が存在する。ここではそれを「わたし」型幸福観と呼ぶ。他方で、「ケア」や「関係」をキーワードとするような幸福観も存在する。それを「われわれ」型幸福観と呼ぶ。この2つの幸福観は、次節で詳しく見るように、人間関係の領域だけでなく、上に挙げた幸福の構成要素のそれぞれにおいても見出すことができる。私たちはつねに、さまざまな場面で、そのような2種類の幸福のあいだで折衝し、自分なりの「しあわせ」を実現しようとしている。言い換えれば、そのバランスを見誤ると、「しあわせ」へ向かう努力も的はずれなものになりかねない。本研究のライフ・インテグレート尺度は、この2種類の幸福観のあいだの理想のバランスを可視化し、それに適した行為を方向づけようとするものにほかならない。



「しあわせ」は「わたし」と「われわれ」のバランス

「わたし」型幸福観は、個人が自律的で自足した人格として完成すること、あるいはそのような完成へと向かうことを理想とする幸福観である。少し強調してまとめるならば、心身ともに健康で、経済的に自立し、明確な人生設計と達成すべき目標をもち、それに向かって最大限に能力を発揮し、成長し、成功し、社会のなかでの自分の居場所を獲得する、これが幸福だとする考え方である。

この幸福観は、最高善としての幸福、すなわち「エウダイモニア」を、人間としての(理性的)能力の最大限の発揮と特徴づけたアリストテレスに端を発する。そして、この幸福観が描くのは、デカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」に象徴される、すべての存在の基礎としての近代哲学的「強い自己」の像であり、その影響のもとで確立された、自由で平等な近代市民社会を構成する「個人」の理想像にほかならない。現代の民主主義社会に生きる私たちは、多かれ少なかれ、こうした理想を受け入れて生きている。

「わたし」型幸福観は、まず個人が他者に依存することなく自立的に存在し、その上で、そうした「自存的自己」が他者と責任ある関係を取り結ぶ、という順番で自己と人間関係を捉える。そこには、自己と(自然を含む)周囲を制御可能な状態におくことこそが成功であり幸福であるという、ある種の支配の構造さえ見え隠れする。しかしもしかしたら、私たちが典型的に思い浮かべる幸福のイメージはこのようなものではないかもしれない。コミュニティサロンでの何気ないやりとり、友人との楽しい食事、家族と過ごす平凡な毎日。明確な規律も支配関係もなく、ただ互いの気遣いによって存立しているそのような場こそが幸福の在り処であり、そのような関係のもとではじめて、自分は自分らしく生きられると感じる人も多いのではないだろうか。

このような幸福観に親近性をもつ思想伝統としては、近代的な自立的自己観に基づく「正義の倫理」へのカウンターとして20世紀後半に提唱された「ケアの倫理」を挙げることができるだろう(Gilligan 1983)。ここでの「ケア」とは、典型的には育児や介護、炊事洗濯のような家事労働を意味するが、より一般的な人間関係における気遣いや、さらに広くは、対象が何であれ何かを「大切に思う(care about)」こと全般を含めてよい(成田 2021)。哲学的ケア概念の提唱者であるメイヤロフは、息子の育児と並んで、自分の構想する哲学理論をケアの対象として論じている(Mayeroff 1971)。

ケアの倫理の最大の特徴は、自立的自己観とは反対に、自己は第一義的にはケアの対象(あるいは逆に自分をケアしてくれる対象)との関係において成立するものとする点にある。私たちの自己は単独では存立せず、つねに互いに依存して存在している。そして、ケアは制御や支配の関係ではないから、どのような自己を形成するかを、私たちは自分では完全に決定できない。気遣いを向けあう者同士のやり取りのなかで、私たちの自己は形成され、変化していく。

とすれば、ケアの場で作り上げられていく自己とは、単数形の「わたし」ではなく、むしろ複数形の「われわれ」である。そして、そのような場やプロセスに幸福が感じられるとすれば、それは「わたし」(だけ)の幸福というよりも、「われわれ」によって共有されるはずの幸福である。自立的自己観に基づく「わたし」型幸福観に対置されるべき、このような幸福観を「われわれ」型幸福観と呼ぶことにしよう。

「われわれ」型幸福観とは、「わたし」と「わたし」が大切に思う対象との関係において、幸福を捉える考え方である。それは、他者の力を借りずに自立することよりも、他者との依存関係において自己が存在することに価値をおく。そのような仕方で存在する「われわれ」は、力を強めて自らを守る壁を築くよりも、自他の脆弱性、傷つきやすさ(vulnerability)を認め、それをケアし合うことで、リスクや困難に対して柔軟に対応しようとする。重視されるのは、対象を思い通りに制御することではなく、ケアしケアされる対象との相互作用を通じて、互いが望む方向へと、自分が対象とともに変容していくことである。

こうした「われわれ」には人間だけでなく動物も、さらには、メイヤロフが自分の哲学理論を「ケア」していたように、「わたし」が大切に思う事柄一般が含まれる。例えば自分の仕事において重要なプロジェクトに携わっているとき、私たちは自分が成功し評価を獲得できるかどうかはいったん横において、まずはそのプロジェクト自体が完遂されるよう心を砕く。そのような「やりがい」や「生きがい」を感じられる対象を見出し、それに精力を注げるということもまた、「われわれ」型の幸福に数え入れられるだろう。

「わたし」型幸福と「われわれ」型幸福、これらには(ここまで少し誇張して述べてきたように)相反する側面もあれば、相補うような側面もある。「わたし」が自立自足した人格として成長し成功するには、周囲の人々からの、あるいは周囲の人々へのケアが必要不可欠だろう。逆に他者を、責任をもってケアするためには、ある程度は人格的にも経済的にも社会

的にも、自らを律した生活を送ることのできる人間でなければならない。また、ケアの対象とはたんに依存し合うだけでなく、「われわれ」として双方が成長できる関係であることが望ましい。

問題は、どうやってそれらのバランスをとるかである。冒頭に挙げた、人間関係における距離感のとり方の難しさは誰も経験するところだろう。また、一種の「わたし」と「われわれ」のあいだの緊張関係と見ることができる、いわゆる「ワークライフバランス」はまさに、現代社会に生きる人々の幸福にとっての中心課題と言ってもよい。あるいは、自身で立てた人生設計に重大な変更をもたらさうる出来事が生じたとき、初志貫徹して目標達成に向かうか、それとも自分が柔軟に変化することで新たな人生の意味を見出すか、そこには一律の答えは存在しない。

私たちの「しあわせ」は、「わたし」型幸福と「われわれ」型幸福のあいだの緊張をもはらんだ相補関係のなかで実現される。それらの望ましいバランスは、個人の性向によっても、置かれたライフステージによっても、あるときに直面した局所的な状況によっても変化する。私たちはそれを絶えず注意深く見極めながら、自分の「しあわせ」にとって最適な行為を導き出し、実行に移していかねばならない。以下で具体的に紹介する、本研究のライフ・インテグレータ尺度項目は、回答者が自分に引きつけて考えやすい4つのファクターの観点から、「わたし」と「われわれ」の最適なバランスを可視化しようとするものである。

4. 4つのファクター

前節で説明したように、本研究では、「しあわせ」は「わたし」型幸福と「われわれ」型幸福という2種類の幸福のあいだのバランスによって構成されると考える。この基本発想にもとづき、本研究が提示するライフ・インテグレータ尺度は、回答者にとっての2種類の



「わたし」と「われわれ」の4つのファクター

幸福のあいだのバランスを、それぞれ共通する4つのファクター(リスク・充実感・人生観・社会統合)を通じて可視化する。それら4つのファクターは、幸福を網羅的に特徴づけるというよりも、幸福との関連性が従来の研究で主張されているとともに、個人が自分の生活に引きつけて考えやすいことを考慮に入れて選択された。以下では、本研究が依拠する先行業績の紹介を含めて、4つのファクターの内容を説明する。

4.1 リスク

質問項目

1. [自助] 病気や災害などさまざまなリスクに対して、自分で貯蓄等の備えを整えている／整えておきたい
2. [共助] 病気や災害で収入を得ることができなくなるなど、自分が本当に困ったときに、自分が属している社会・共同体は自分を助けてくれると思う／助けてくれる社会・共同体であってほしい

この「リスク」のファクターでは、「しあわせ」に対するネガティブ要因との向き合い方について尋ねる。そこではとくに、怪我や病気、経済的困窮など現実起こった「悪いこと」に対してではなく、何か悪いことが起こる可能性、すなわちリスクに対する考え方に注目する。リスクとは、実際に災難に遭遇しなくとも、すべての人が多かれ少なかれ直面しているもののはずであり、それゆえに回答者も自身の普段の生活に照らして考えやすいと想定できるからである。

経験的な心理学的調査においても、リスクの存在はそれだけで、幸福の阻害要因となるという結果が存在する。例えば、Caria & Falco (2018)では、所得の低下リスクが大きい、つまり実際に所得が低下しているかどうかは別としてその可能性が相対的に高い地域では、住民男性の幸福度は低くなると報告されている。さらに、近年の日本における社会調査では、幸福の阻害要因の第1位は「将来への不安」であるという結果も報告されている(朝日広告社 2021)。現時点ではほぼ問題のない生活レベルを維持できていたとしても、とくにそのような人々がマジョリティを占めると言ってよい日本においてはそれだからこそ、将来の不確実性に目が向くのは自然なことであろう。

では、私たちが直面しているリスクに対処し、幸福のネガティブ要因を取り除くにはどうすればよいか。保険や貯蓄、資産運用などでリスクをある程度吸収し、何かことが起こったときにもそこからすぐに回復できるような、レジリエントな環境を整えておくこと以外に、個人としてできることはないだろう。ただ、例えば貯蓄のために支出を極端に切り詰めたりするのは、将来のために現在の幸福を犠牲にしているとも言える。それゆえ、リスクに対する備えは必要だとしても、それをどれだけ求めるかは人によって、また当人のライフステージによっても異なって当然であろう。

また、そうした「自助」的なリスク対策が、幸福を阻害する不安の解消にどこまでつながるかは必ずしも明らかではない。近年の調査において不安要因として上位に挙げられているのは、自身の病気や失業などよりも、新型コロナウイルス感染症の流行や気候変動による災害の増

加である(セコム株式会社 2021)。こうした自然環境や社会構造の大きな変動に起因するリスクに対して、個人で立ち向かうには限界がある。では、自分が属する共同体、日本、そして国際社会は、私たちにどれだけのセーフティネットを提供してくれると期待できるだろうか。逆に、そうした巨大なリスクに社会全体で対処するにあたって、自分はどのような貢献をしたいか(あるいはしようと思わないか)。

以上のように、「しあわせ」のネガティブ要因としてのリスクについては、「わたし」型幸福の領域に属する個人による「自助」的な対策だけでなく、社会全体の「共助」による「われわれ」型幸福の側面も重要であり、私たちそれぞれのリスク観は、それらのバランスの中で形作られると言ってよいだろう。本尺度では、「自助」についての質問1と「共助」についての質問2によって、回答者のリスク観を可視化する。

4.2 充実感

質問項目

3. [挑戦] 日常生活・仕事・その他の活動において、自分の可能性を限界まで追求している／追求したい
4. [ケア] 休息や趣味、家事、家族・友人とのコミュニケーションなど、自分にとって大事な人・もの・ことに対して、十分な時間をとっている／とりたい

以降の3ファクターは、「しあわせ」のポジティブ要因にかかわる。まずこの「充実感」のファクターでは、日々の生活においてどのようなときに充実感を覚えるかを尋ねる。このファクターはゴールではなくプロセスにかかわる。すなわち、人生設計や目標設定がどのようなものであれ、あるいはそれを達成できるかできないかはひとまず別問題として、回答者にとって、毎日を生き生きと、やりがいや生きがいを感じて暮らせるのはどういうときか、を明らかにしようとする。

先ほども触れたように、アリストテレスは、最高善としての幸福、すなわちエウダイモニアを、自分の能力を適切に、最大限に発揮できている状態のこととした。エウダイモニア的幸福観は現代の幸福論においても大きな影響をもっており、例えばセリグマンの「Flourish」をその有名な例として挙げることができるだろう(Seligman 2012)。そうした幸福論が示すように、仕事であれ趣味であれ、自分の資質、特性にフィットした領域を見出し、そこで自分の成長と前進を感じながら日々活動できるということが、一つの理想であることに議論の余地はないだろう。

ただし、このエウダイモニア型充実感は、「楽しい」「うれしい」といった、感情としての幸福感を伴うとはかぎらない。ある目標に向かって自分の能力を最大限に引き出し、さらにはその限界を超えようとするときには多大な努力が必要であり、それには強いストレスが伴うだろう。それにもかかわらず、そこにやりがいを感じるがゆえに、自分の可能性を追求する生き方を選ぶか、それとも、ストア派的ヘドニズムにならって強いストレスを避け穏やかな生活を選ぶかは、ここでも個人によって、また当人のライフステージによって異なるの

が当然である。

エウダイモニア型充実感を追求しない生活を選ぶことは、ともすれば退嬰的な姿勢に映るかもしれないが、必ずしもそうではない。例えば、家族や友人などとゆっくり過ごしたり、休日に趣味の作業をマイペースで進めたりしているときに得られる充実感は、エウダイモニア的なものとは種類は異なるが、しかし何らそれらに劣るものではないだろう。仕事にかんしても、自分を成長させ厳しい競争に勝ち抜くことだけが望ましいキャリア像ではない。華々しい成果が出るようなことはなくとも、日々の仕事を誠実にこなしていくことから得られる充実感も存在するはずである。

本研究では、このような種類の充実感を「ケア」というタームで特徴づける。本研究の提示する「われわれ」型幸福観を象徴するこの「ケア」概念は、育児や介護といった家事労働を典型例としつつ、英語の「care about」、日本語で「大切に思う」こと一般を含む(成田 2021)。家族・友人であれ、趣味であれ、仕事であれ、自分が大切に思う対象を、何らかの要因に阻害されることなく、自分に合った仕方大切にできていること。このようなケア型の充実感もまた、エウダイモニア型充実感と並んで重視されるべきである。

こうしたケア型の充実感がエウダイモニア型と異なるのは、まず、後者が目を向けているのは自分自身、つまり自分の能力の発揮であるのに対し、前者は他者・対象との関係のもとで捉えられる点である。第二に、比較的客観的な指標のもとでの成功や達成を念頭においたエウダイモニア型とはちがって、何をどれだけ大切に思い、大切にすることの基準は個人に独自のものでありうる。もちろん、キャリアの追求こそが自分にとって大切であると思う人にとっての充実感も、エウダイモニア型でもケア型でもありうるだろう。つまり、両者は必ずしも排反的なものではない。それらは、日々の生活を満足いくものにするのは何かについて、それぞれ異なる角度から光を当てる基準なのである。本尺度では、「わたし」型幸福の領域に属するエウダイモニア型充実感についての質問 3 と、「われわれ」型幸福の領域に属するケア型充実感についての質問 4 を通して、回答者にとっての充実感を立体的に明らかにしようとする。

4.3 人生観

質問項目

5. [自律性] 長期的な目標を設定し、それに向かって計画的にものごとを進めている／進めたい
6. [順応性] これまでの人生では、思いがけない出会いや出来事によって想定外の展開が起こることが多かった／これからも想定外の展開に期待する

前項目の「充実感」が進行形のプロセスにおける幸福についてのファクターであったとすれば、この「人生観」のファクターでは、人生を俯瞰的視点から眺めたときの幸福について尋ねる。

「しあわせとは何か」という問いは、「意味ある人生とは何か」という問いと密接に関係している。前項目で見たとおり日々の生活を充実感とともに過ごすことは重要ではあるが、

そうした生活の積み重ねが、自身の人生を全体として意味あるものとするのでなければ、日常的な幸せも刹那的なものに思えるかもしれない。「しあわせ」は、ライフスケールでの俯瞰的視点と進行形のライブ視点の相互往還のなかで捉える必要がある。

では、意味ある人生とは、人生の意味とは何か。近現代哲学におけるひとつのキーワードは「自律」であろう。近現代以前であれば、宗教や伝統、慣習などによって、人々の生のあり方、言い換えれば人生の意味は大部分規定されていた。しかし、宗教や伝統の影響力が弱まった近現代においては、そうした外からの意味づけは失われ、私たちは自分の人生に対して自律的に、自分自身の力で意味を与えねばならなくなった。人生において達成したい目標を自分で定め、それに向かうための計画を立案し、自身の生活を律してその計画を実現していく。こうした自律的人生設計こそが、私たちの時代における「意味ある人生」の基本モデルと言えるだろう (cf. Taylor 1992)。

経験的調査でも、自律的人生設計がウェルビーイングに貢献していることを示す結果が存在する。例えば MacLeod (2012)では、「高いウェルビーイングは、本人の価値観と整合する内的理由に基づいて設定された…(中略)…目標への前進と、それらの目標へと到達するために適切に設定された計画と、その両方に結び付けられる」とされる。

一方で、人生とは概して計画通りに進まないものであり、それだからこそおもしろいという考え方にも一定の説得力がある。人生設計に乱れを生じさせるような、予定外のハプニングや出会いこそが、自身の新たな可能性を拓くチャンスであったと感じている人も多いだろう。そうした出来事が自分にとってどのような意味をもつのかは、前もってはもちろん、ことが起こった時点でも不明であったはずである。それらの意味は、後に振り返ってはじめて理解可能なものとなる。「[人生の]意味は、先を見越して求められるものでもあるが、典型的には、回顧的に獲得される。意味とは、しばしば、事実が生じた後に見いだされるものなのである」(Heyd & Miller 2010)。

もちろん、「回顧的に獲得」された意味が、自分にとってポジティブなものとなるのは、起こった出来事に対し、それがたとえ計画外のものであったとしても柔軟に、そして積極的に対応したからであろう。ある学生集団に対する調査では、「自分は幸福である」と自己診断する学生は、自分にとってポジティブな出来事、ネガティブな出来事の双方に対して、より好意的に、より適応的に受け止める、という結果が得られている (Lyubomirsky & Tucker 1998)。自律性と並んで、順応性もまた、幸福への鍵であることは間違いないように思われる。

自律的な人生設計を重視するか、ハプニングに対する順応性を重視するか、個人の性向やライフステージによってその重心は異なりうるかもしれないが、これらは決して相反するものではなく、むしろどちらも欠くべからざる態度であるように思われる。本尺度では、「わたし」型幸福に分類しうる自律的人生設計についての質問5と、「われわれ」型幸福に分類しうる順応性についての質問6を通じて、回答者の思い描く2つの要素のあいだのバランスを可視化する。

4.4 社会統合

質問項目

7. [承認] 自分が社会の中で認められていると感じる／感じていたい
8. [弱いつながり] 近所の住民や店員、仕事上の顔見知りなど、会えば挨拶をする程度の知り合いが多くいる／多く作っておきたい

ここまでも、「われわれ」型幸福についての質問は基本的に、自身と他者との関係について尋ねるものであったが、ここでは自分の周囲の社会環境との付き合い方について明示的に尋ねる。

置かれた社会環境が人の幸福／ウェルビーイングに影響を与えることは言うまでもなく明らかなことであろう。経験的な調査でもそのことは確かめられている(Keyes 1998)。もちろんそうした「社会的ウェルビーイング」にはさまざまな側面がある。質問7が尋ねているのは社会的な「承認」についてであるが、他にも例えば、自分の属する共同体の構成員のことを信頼、信用できるか、社会全体がよい方向へ向かっていると感じられるか、社会がどのような仕組みで動いているか把握できているか、といった観点からも、社会における幸福は考えることができる。

ただし、このような意味での社会的幸福は、得られるに越したことはないが、厳密な意味では実現は難しいだろう。すなわち、社会の構成員がそれぞれ信頼のおける人格として自律し、そうした人格のあいだの相互承認を通じて、よい社会が作り上げられるという、「わたし」型幸福に分類されるべき理想像は、たしかに理想ではあるが、私たちの社会生活の実際からはかなりかけ離れている。社会の大半の人々は自分にはそもそも無関心で、いざ話をすれば意見は合わず、信じられない振る舞いで自分を不快にする。選挙では自分の意見は反映されず、結果として社会課題の解決は進まない。誇張気味ではあるが、これが私たちの「隣人」に対する基本的な印象ではないだろうか。それでも、この社会に対して希望をもちうるとすれば、それはどのような姿勢においてだろうか。

ここで私たちは「弱いつながり(weak ties)」という概念に注目する。この概念はもともと、社会学者グラノヴェッター(Granovetter 1973)が導入した社会ネットワーク理論上の概念であり、家族や友人、職場の同僚などの「強いつながり」と対比して、近所の住民や仕事上の知人など、会えば挨拶をする程度の関係性を表す。グラノヴェッターが明らかにしたのは、情報伝播の質や効率性にとっては、強いつながりよりもむしろ弱いつながりが重要であるということだったが、近年では、幸福研究の分野でも、幸福／ウェルビーイングに寄与するものとして重視されるようになってきている(Sandstrom & Dunn 2014)。

周囲の人々と強いつながりを持ち、互いにケアしながら心地よい生活環境のなかで過ごすことは、幸福にとって疑いようもなく重要である。しかし、そうした意味での「われわれ」は同時に、その裏返しとして「われわれでない他者」の存在を伴っている。もしその内外の区別が、自分の属するコミュニティの閉鎖性や排他性を導くのであれば、強いつながりの心

地よさは、永続的な幸福を約束してはくれないだろう。すべての人々と強いつながりをもつことは不可能だとしても、「われわれ」の境界線はつねにあいまいで、開かれたものであることが望ましい。

自分と弱いつながりで結ばれた人々は、自分にとっての「われわれ」の境界線に位置する人々である。互いの人生に影響を及ぼすことはおそらくなく、何か話し合ってもまったく意見の合わない人でさえあるかもしれない。それでも、同じ共同体を構成する仲間として、ある程度の距離を保って付き合っておくことで、「われわれ」の風通しはよくなるだろう。弱いつながりを通じて伝播する情報としてグラノヴェッターが調査したのが求職情報であったように、弱いつながりに開かれた「われわれ」は実際的な面でもわかりやすく有益であるが、社会階層や情報格差による社会分断が危惧されるこんにちでは、境界のあいまいな「われわれ」を維持することの重要性はますます高まっている。

本尺度の質問 8 では、「わたし」型幸福に分類されるべき社会的承認(質問 7)と対比させながら、「われわれ」型幸福に分類される弱いつながり(質問 8)についての考え方を尋ねる。

5. まとめ：「お金」から「しあわせ」へ

本研究の出発点となったのは、「健全な資産形成の習慣がなぜ根付かないのか」という問いだった。私たちはこの問いに対して、「資産運用がもたらすお金という価値と、私たち自身の幸福という価値との結びつきが薄弱だから」という、大雑把な作業仮説を立て研究をスタートさせた。さまざまな分野の先行業績を通じて幸福について考察するうちに、この「仮説」はより明確化されることになった。幸福は、人生を構成する多元的な要素からデザインされる価値のマトリクスであり、そしてそれは、「わたし」(そして「われわれ」)固有の一人称的視点から価値づけられたものであるがゆえに、私たちの行為を駆動する。とすると、「お金」は幸福とは正反対のものと言ええる。それは、すべての事情を捨象し、価値を一元的な数値として表現する媒体であり、私たちが互いにやりとりするための通貨であるがゆえに、徹底して三人称的、あるいは非人称的なものである。資産運用を通じてお金を貯める、殖やすという目的は、その価値がきわめて明確であるように見えて、じつはそれ自体では、私たちが一人称的な仕方で駆り立てるものではないのである。しばしば「資産形成の必要性は理解しているつもりだが踏み出せない、続かない」という声が聞かれるのは、そのためであろう。

こうした声を踏まえて、資産運用の現場では、ドル・コスト平均法や分散投資、パッシブ運用といった手法を用いて、顧客の認知的・心理的負担を下げる方向で対応するのが主流となっている。お金のことを考えるという気の重い思考を節約し、むしろ気がつかないうちに資産形成が進んでいくほうがよいだろうというわけである。しかし、これは問題の先送りにすぎないだろう。お金の問題をより包括的な「しあわせ」という価値観のなかに位置づける試みを避けてきたからこそ、資産形成の実践はこれまで定着することはなかったのである。とはいえ、ここまで論じてきたように、自分にとっての「しあわせ」とは何かを見定めるこ

とは、やはり容易なことではない。だからこそ人は、価値の問題をシンプルな数値としてのお金の増減に帰着させてしまう。しかし前述べたように、それは結局、私たちがお金の問題に自分ごととして取り組む動機を薄れさせてしまうのである。

本研究が提示したライフ・インテグレート尺度は、このディレンマ状況への一助となることを意図している。「しあわせ」を構成する多元的な要素を、無理に一元化することなく統合的に吟味すること。非人稱的な基準で自分を採点するのではなく、自分固有の基準を設定すること。日々の行為と人生全体のグランドデザインを関連づけ、「わたし」と「われわれ」のバランスを注意深く保つこと。「しあわせ」像を設定するには、このように複雑な思考が要求される。その複合的な構想をわかりやすく可視化し、次なる行為をドライブする媒体として、ライフ・インテグレート尺度は設計されている。

そして、私たちの尺度の内容を見るならば、(ギャンブル的な投機とは区別される)健全な資産形成とは、まさに「しあわせ」を実現しようとする行為にほかならないこともわかるだろう。自分の直面するリスクを査定し、適切な対策を講じる。市場メカニズムのもたらす偶然性のある程度許容しながらも長期的な運用目標を見失わず、着実な成長を追求する。一方で、長期目標のために日々の生活の豊かさを犠牲にしない。そして、投資というすぐれて社会な行為を通じて、「わたし」固有の価値と「われわれ」の公共的価値の双方の実現を目指す。「お金」という平板化された価値基準からいったん離れると見えてくるのは、資産形成とはじつはそれ自体で、「しあわせ」と深く結びついた実践だということなのである。

アリストテレスは幸福を「能力の発揮」と特徴づけた。つまり彼にとっては、幸福は幸運とは異なる。もし幸運が向こうから転がり込んできたとしても、それを自分固有の価値観のもとで意味づけ、人生という行為に活かせなければ、幸福とは言えないのである。これは、私たちに注意深い思考と実行力を要求する、厳しい幸福観ではある。言い換えれば、幸福を追求するのは容易なことではない。幸福追求の行為としての資産形成の習慣が根付かないのも、ある意味で当然とも言える。しかしもし、追求すべき幸福像が、世間一般で言われるお仕着せのものでも、「お金」として平板化されたものでもなく、「わたし」、そして「われわれ」に固有な「しあわせ」として明確化できたとしたらどうか。本研究のライフ・インテグレート尺度が、多元的で固有な価値のマトリクスの可視化を通じて、「しあわせ」を追求する生活への第一歩を駆動できたとすれば、それによって本研究の目的は果たされたことになるのである。

付録. 先行調査の結果

本研究では、ライフ・インテグレート尺度の各項目の独立性や、尺度項目の回答と回答者の他の属性のあいだの関係などを検討するため、先行調査を行った。ここでは、インターネットを通じてお金のデザイン社の顧客を対象に行った調査の結果を報告する。

概要

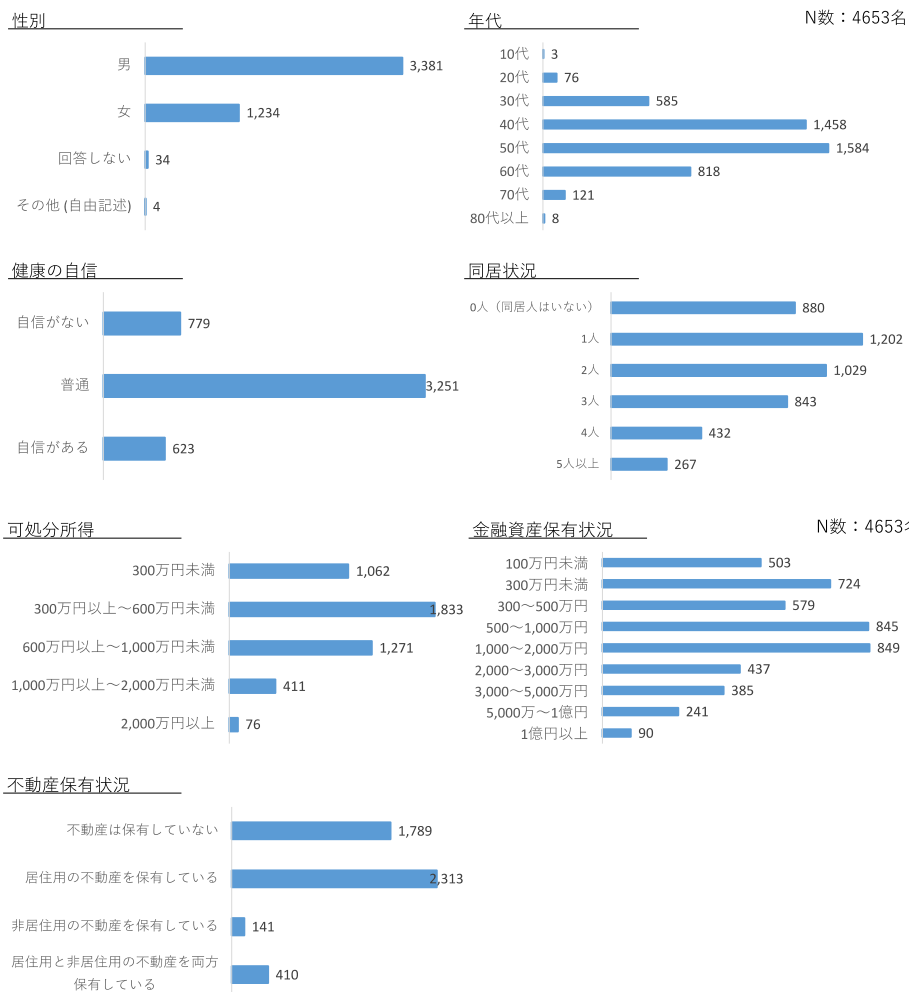
- 実施方法 : インターネットアンケート調査
実施期間 : 2022年10月3日~10月10日
対象者 : 投資一任(ロボアドバイザー)顧客
抽出方法 : 顧客構成の性年代と同割合になるよう抽出
N数 : 4,653名(有効な回答者数)
目的 : 「しあわせ」の定量的尺度を表す仮説の検証

質問項目

本調査では、ライフ・インテグレート尺度の16の質問項目(8つの質問について現状と理想を回答)に加えて、回答者の年齢・資産等の属性を尋ねる質問と、人生・生活全般の「順調さ」を尋ねる質問に回答を求めた。質問は以下の通り。

属性についての質問

- 性別：男性・女性・回答しない・その他(自由記述)
 - 年代：10代~80代以上
 - 健康：自信がない・普通・自信がある
 - 同居状況：0人(同居人なし)~5人以上
 - 可処分所得：300万円未満~2,000万円以上
 - 金融資産保有状況：100万円未満~1億円以上
 - 不動産保有状況：保有していない・居住用・非居住用・両方
- 属性についての調査結果は以下の通り。



人生・生活全般の「順調さ」についての質問

1. 今までの生き方を考え直してもいいかなと思っている
2. 周囲の社会環境が変わってきていると思う

結果

1. 質問項目・属性の独立性

ライフ・インテグレート尺度の16の質問項目のあいだには有意な相関は見られず、個別の項目同士はある程度独立性が高いと考えられる。また、回答者の属性、および順調さを尋ねる質問と尺度項目のあいだにもほとんど相関は見られなかったが、唯一、リスクに対する備えについての質問(質問1)に対して高い点数をつけた群は、より多くの金融資産を保有している傾向にあった。すでに保有している金融資産に対するリスク回避意識が働いていると思われる。

2. 現状と理想のギャップと人生の順調さについて

尺度項目の現状と理想についての回答のあいだに大きなギャップがある場合、回答者は

現状に何かしらの違和感を覚えている可能性がある。そこで本調査では、尺度項目に対する回答のギャップと、人生の順調さについての回答のあいだの関係について検討した。まず、回答者のうち次の3つの群(A)(B)(C)と2つの条件(D), (E)の組み合わせに注目した。

- (A) 「現状・理想ともに高」群 = 両方の回答が4以上の質問が8項目中5項目以上
- (B) 「現状<理想」群 = 現状が2以下、理想が4以上の質問が8項目中5項目以上
- (C) 「現状>理想」群 = 現状 - (マイナス) 理想が2以上の質問が8項目中3項目以上
- (D) 順調さについての質問1.「今までの生き方を考え直してもいいかなと思っている」に対する回答の平均値が他の回答者の平均よりも高い
- (E) 順調さについての質問2.「周囲の社会環境が変わってきていると思う」に対する回答の平均値が他の回答者の平均よりも高い

これらからなる6つの組み合わせ (A、B、C各項目)は(D または E)と相関関係を有すると仮定して、それぞれt検定(分散が等しくないと仮定した2標本による検定、有意水準5%)によって検討した。結果は次の表のとおり。

	(A)	それ以外
質問1平均	3	3.1831
分散	1.2995	1.0775
観測数	869	3784
仮説平均との差異	0	
自由度	1220	
t	-4.341	
P(T<=t)片側	8E-06	
t境界値片側	1.6461	
P(T<=t)両側	2E-05	
t境界値両側	1.9619	

表1 仮説(A)-(D)

	(B)	それ以外
質問1平均	3.8496	3.1315
分散	0.9861	1.1149
観測数	113	4540
仮説平均との差異	0	
自由度	118	
t	7.5808	
P(T<=t)片側	4E-12	
t境界値片側	1.6579	
P(T<=t)両側	9E-12	
t境界値両側	1.9803	

表2 仮説(B)-(D)

	(C)	それ以外
質問1平均	2.2683	3.1568
分散	1.7512	1.1116
観測数	41	4612
仮説平均との差異	0	
自由度	40	
t	-4.287	
P(T<=t)片側	6E-05	
t境界値片側	1.6839	
P(T<=t)両側	0.0001	
t境界値両側	2.0211	

表3 仮説(C)-(D)

	(A)	それ以外
質問2平均	4.084	3.8605
分散	0.7383	0.8021
観測数	869	3784
仮説平均との差異	0	
自由度	1336	
t	6.8608	
P(T<=t)片側	5E-12	
t境界値片側	1.646	
P(T<=t)両側	1E-11	
t境界値両側	1.9617	

表4 仮説(A)-(E)

	(B)	それ以外
質問2平均	4.0708	3.898
分散	0.8699	0.7953
観測数	113	4540
仮説平均との差異	0	
自由度	117	
t	1.9471	
P(T<=t)片側	0.027	
t境界値片側	1.658	
P(T<=t)両側	0.0539	
t境界値両側	1.9804	

表5 仮説(B)-(E)

	(C)	それ以外
質問2平均	3.5366	3.9055
分散	1.7549	0.7883
観測数	41	4612
仮説平均との差異	0	
自由度	40	
t	-1.779	
P(T<=t)片側	0.0414	
t境界値片側	1.6839	
P(T<=t)両側	0.0828	
t境界値両側	2.0211	

表6 仮説(C)-(E)

	(D) 生き方を考え直してもいい	(E) 周囲の社会環境が変化
(A) 現状・理想ともに高	反証	立証
(B) 現状<理想	立証	棄却
(C) 現状>理想	反証	棄却

仮説の検証結果

- (A)「現状・理想ともに高」群、および(C)「現状>理想」群は、順調さについての質問1に対する回答の平均値が他のグループより有意に低く、仮説(A)と(D)および(C)と(D)の関係は反証された。
- 対して(B)「現状<理想」群では、同じく順調さについての質問1に対する回答の平均値は他のグループより有意に高く、仮説(B)と(D)の関係は立証された。
- 順調さについての質問2については、(A)「現状・理想ともに高」群の回答の平均値が他のグループより有意に高く、仮説(A)と(E)の関係は立証された一方、(B), (C)群との関係については有意差は出なかった。

(D)については「現状」の高い群(A)と(C)が「いまの生き方を変える必要はない」、つまり現状に満足しており、他方で「理想」は高いが「現状」がそれに追いついていない群(B)は、現状からの何らかの方針転換（或いは、現状以上の理想に近づくための“成長”を“転換”ととらえているのかもしれないが）を考えていることがわかった。(E)については、現状・理想ともに高い群(A)のみが周囲の環境変化を感じている。これが意味するところをこのアンケート結果のみから推測することはむずかしい。例えば、人生の多くの側面に対して理想を高く掲げる人は、周囲の状況に敏感になるのか、あるいは、周囲の環境が好転していると感じた結果、もっと多くを望んでもよいと思うようになったのか、いくつかの解釈が可能である。今後の研究課題としたい。

3. 「わたし」と「われわれ」

各質問項目を個別に見た場合、他の質問項目や属性との相関はほとんど見られなかったが、「わたし」「われわれ」という分類で検討すると、ある一定の傾向が見られた。まず、4つのファクターのそれぞれについて、(a)「わたし」型幸福についての質問(1, 3, 5, 7)に対する現状と理想の点数の合計と、(b)「われわれ」型幸福についての質問(2, 4, 6, 8)に対する現状と理想の点数の合計とを比較し、4つのファクターすべてで(a)が(b)よりも高い回答者を「「わたし」傾向が強い」(72名)、反対に4つのファクターすべてで(b)が(a)よりも高い回答者を「「われわれ」傾向が強い」回答者(101名)と分類した。

この分類と属性についての質問回答を比較すると次のような結果が得られた。

属性	項目	番号	全ファクター「わたし」		全ファクター「われわれ」		差分	差分（絶対値）
			回答割合	回答割合	回答割合	回答割合		
性別	男	1	71%	61%	9%	9%		
性別	女	2	29%	38%	-8%	8%		
性別	回答しない	3	0%	0%	0%	0%		
性別	その他	4	0%	1%	-1%	1%		
年代	10代	1	0%	0%	0%	0%		
年代	20代	2	0%	1%	-1%	1%		
年代	30代	3	15%	19%	-4%	4%		
年代	40代	4	38%	34%	4%	4%		
年代	50代	5	29%	30%	-1%	1%		
年代	60代	6	17%	13%	4%	4%		
年代	70代	7	0%	4%	-4%	4%		
年代	80代以上	8	1%	0%	1%	1%		
健康の自信	自信がない	1	14%	30%	-16%	16%		
健康の自信	普通	2	68%	62%	6%	6%		
健康の自信	自信がある	3	18%	8%	10%	10%		
可処分所得	300万円未満	1	21%	29%	-8%	8%		
可処分所得	300万円以上～600万円未満	2	46%	50%	-4%	4%		
可処分所得	600万円以上～1,000万円未満	3	25%	21%	4%	4%		
可処分所得	1,000万円以上～2,000万円未満	4	6%	1%	5%	5%		
可処分所得	2,000万円以上	5	3%	0%	3%	3%		
金融資産	100万円未満	1	7%	22%	-15%	15%		
金融資産	300万円未満	2	15%	22%	-7%	7%		
金融資産	300万円以上～500万円未満	3	4%	14%	-10%	10%		
金融資産	500万円以上～1,000万円未満	4	18%	14%	4%	4%		
金融資産	1,000万円以上～2,000万円未満	5	22%	17%	5%	5%		
金融資産	2,000万円以上～3,000万円未満	6	10%	6%	4%	4%		
金融資産	3,000万円以上～5,000万円未満	7	7%	4%	3%	3%		
金融資産	5,000万円以上～1億円未満	8	14%	1%	13%	13%		
金融資産	1億円以上	9	3%	1%	2%	2%		
不動産保有状況	不動産は保有していない	1	36%	44%	-7%	7%		
不動産保有状況	居住用の不動産を保有している	2	49%	49%	0%	0%		
不動産保有状況	非居住用の不動産を保有している	3	3%	1%	2%	2%		
不動産保有状況	居住用と非居住用の不動産を両方保有している	4	13%	7%	6%	6%		
同居状況	0人（同居人はいない）	0	18%	20%	-2%	2%		
同居状況	1人	1	22%	23%	-1%	1%		
同居状況	2人	2	21%	26%	-5%	5%		
同居状況	3人	3	26%	16%	11%	11%		
同居状況	4人	4	6%	12%	-6%	6%		
同居状況	5人以上	5	7%	4%	3%	3%		

「わたし」傾向／「われわれ」傾向と回答者属性の関係

- 「わたし」傾向の強い回答者のほうが「健康に自信がある」と答える傾向が強く、「われわれ」傾向の強い回答者では反対の傾向が見られる。
- 「わたし」傾向の強い回答者のほうが、資産（可処分所得、金融資産、不動産保有状況）にかんする質問回答のいずれにおいてもより高い点数をつける、すなわちより多くの資産を保有している傾向が強い。

つまり、客観的指標において相対的に「豊か」と見なしうる回答者は「わたし」傾向が強く、そうでない回答者は「われわれ」傾向が強い。このことは、自律・自足をキーワードとする「わたし」型幸福と、ケアと関係性をキーワードとする「われわれ」型幸福のそれぞれの内容とうまく符合するように見える。

参考文献

Caria, S. A., & Falco, P. (2018). Does the risk of poverty reduce happiness?. *Economic*

- Development and Cultural Change*, 67(1), 1-28.
- Gilligan, C., (1983). *In a Different Voice*. Harvard University Press (川本隆史・山辺恵理子・米典子訳『もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理』, 風行社, 2022年).
- Heyd, D., & Miller, F. G. (2010). Life plans: Do they give meaning to our lives?. *The Monist*, 93(1), 17-37.
- Granovetter, M. S. (1973). The strength of weak ties. *American Journal of Sociology*, 78(6), 1360-1380.
- Kavedžija, I. (2015). The good life in balance: Insights from aging Japan. *HAU: Journal of Ethnographic Theory*, 5(3), 135-156.
- Keyes, C. L. M. (1998). Social well-being. *Social Psychology Quarterly*, 121-140.
- Lyubomirsky, S., & Tucker, K. L. (1998). Implications of individual differences in subjective happiness for perceiving, interpreting, and thinking about life events. *Motivation and Emotion*, 22(2), 155-186.
- Mayeroff, M., (1971). *On Caring*. Harper Collins Publishers (田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』, ゆみる出版, 1987年).
- MacLeod, A. (2012). Goals and plans: Their relationship to well-being. In *A Positive Psychology Perspective on Quality of Life* (pp. 33-50). Springer, Dordrecht.
- Sandstrom, G. M., & Dunn, E. W. (2014). Social interactions and well-being: The surprising power of weak ties. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 40(7), 910-922.
- Seligman, M. E. (2012). *Flourish: A Visionary New Understanding of Happiness and Well-being*. Simon and Schuster.
- Taylor, C. (1992). *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*. Harvard University Press.
- 朝日広告社. (2021). 「第 1 回「ウェルビーイングに関する調査」」, <https://www.asakonet.co.jp/wp-content/uploads/2021/12/5cfdbc451f3b49c87980c377d1f83cee.pdf> (2022年11月14日閲覧)
- セコム株式会社. (2021). 「第 10 回「日本人の不安に関する意識調査」」, https://www.secom.co.jp/corporate/release/2021/pdf_DL/nr_20211202.pdf (2022年12月6日閲覧)
- 成田和信、『幸福をめぐる哲学: 「大切に思う」ことへと向かって』, 勁草書房, 2021年.